

# 新生児 Special care unit における母子相互作用の臨床的・心理行動科学的研究

小川次郎（聖隷浜松病院）  
神谷育司（名城大学）  
白岩義夫（金城学院大学）  
加藤実（浜松短大）  
柴田隆（順天堂大学伊豆長岡病院）  
犬飼和久（聖隷浜松病院）  
内堀さつき（ ” ）

NICUを含む新生児 special care unit 内の未熟児を対象に早期からの母子接触の意義について、母性並びに母性行動について、さらに児の側の問題として未熟児の行動発達、日内リズムなどの24時間ビデオによる分析などの研究をして、母子相互作用の基本的課題について検討してきた。これらの研究成果に立脚して、今後の課題として次の如きものを企図している。

未熟児センターにおける早期の母子接触の意義を、児の発達成長の過程の中に、また母子相互作用の中に長期的展望をもって観察、検討する。対象は比較的順調な経過をとった1,500gr以下の極小未熟児で、入院中に母子相互作用について観察した症例である。現在退院後、生后8ヶ月～1年の時点でストレイチ場面を設定し、アタッチメント形成初期の母子相互作用について、検討をつづけている。一方同センターを退院したあとの特に極小未熟児を対象にその後の成長、発達の過程を3才及び6才の時点で検討する。その方法としては母親からの児の生活環境及び育児に対する態度などを質問紙調査及び面接調査法で検討するとともに、併せて児の発達検査をなし、その相互の関連性を検討する。

また一方、NICU内の母子関係の一方の担手である児に一つの重要な問題がある。すなわち、母子相互作用が成立するためには、母親の働きがけに対する児側、未熟児に応答する能力がそなわっていないなければならない。今日までの研究で満期産新生児に知覚能力あるいは種々の刺激に対する応答能力に関しては、ミクロ、マクロの両水準でかなりの知見が得られている。これに対して、こ

れらの能力に関する未熟児の研究は未だ充分とはいええない。そこでこれまでの24時間ビデオによる連続監視による日内リズムの発達の検討に加えて、更に現在未熟児の行動発達をみる一側面として、種々の聴覚刺激（例えば成人の声や純音など）を使用して、身体的運動や生理的反応を手掛りに、NICU内の未熟児の反応性、応答性について検討しており、今後つづけてゆきたい。

## 昭和58年度研究報告

男性および女性成人の呼び掛けに対する未熟児の反応

—身体的活動と心理生理学的反応を指標として—

修正在胎週数でほぼ満期に近い未熟児8名を対象に、男女成人の呼び掛け（ヨシ・ヨシ）および純音500Hzと1500Hz（持続時間1.5秒）に対する反応が調べられた。あらかじめカセットテープに録音されていた4種類の刺激が各々10回づつ、対象児の耳元で85dBの強さで与えられた。

その結果、身体的活動（頭、腕および目の動き）に関しては聴覚刺激の違いによる効果を見出すことが出来なかった。心理生理学的反応である心拍率では、女性の声に対しては加速を、男性の声に対しては減少を示した。2種の純音に対してはあまり変化を示さなかった。一方呼吸反応では、女性の声に対して増加を見せたのに対して、男性の声や純音には減速で応答した。

このような心理生理学的反応に見られた反応の違いについては、女性の声に対する反応は喜びを、男性の声や純音に対する反応は注意状態を反映するものと考えられた。